

41365

教科書文庫

4
810
31-1928
25000 30957

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

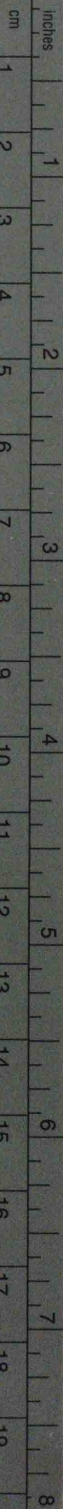


© Kodak, 2007 TM, Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM, Kodak



T 1A4
1H8
N-71

尋常 小學

國語讀本

卷四

文部省





尋常



小學  
國語讀本

卷四

文部省

登錄番号	30957
分	375.9
類	M

もくろく

一 お祭	一	十三	夏はがき	五十二
二 柿	四	十四	お話二つ	五十三
三 十一月三日	八	十五	しひの木とかしのみ	五十五
四 麥まき	九	十六	大工小屋	五十七
五 白ウサギ	十二	十七	扇のまと	六十一
六 をぢさんのうち	二十一	十八	山がら	六十七
七 私どもの町	二十六	十九	ナゾ	七十
八 山びい	三十	二十一	一本杉	七十二
九 フクロフ	三十四	二十二	汽車のたび	八十一
十 目と風	三十八	二十三	ヒナマツリ	八十四
十一 すすはき	四十	二十三	春が来た	八十八
十二 かるた取	四十六	二十四	曾我兄弟	八十九

國四

一 お祭

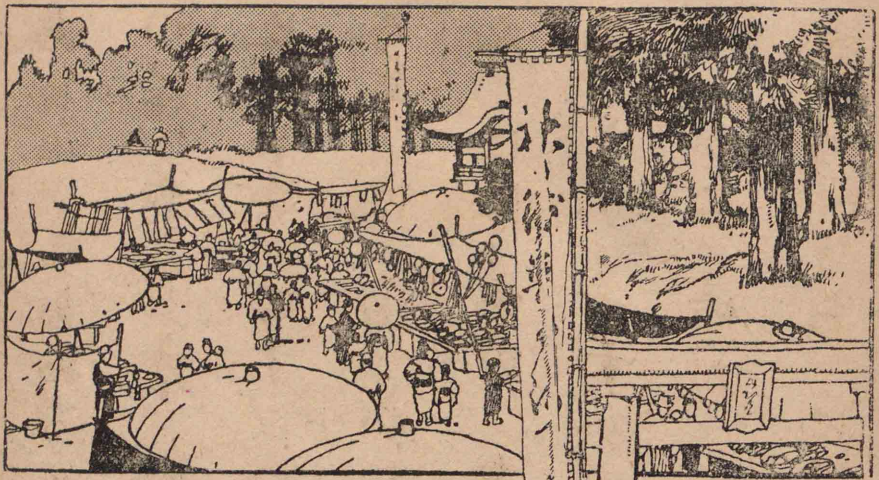
森 うぢがみ さまの森で、あさからた  
 いこのおとがします。今日はお祭  
 です。大きな字を書いたのぼりが  
 すみきつた空に立つてゐます。  
 おひるすぎに、をばさんのうちから  
 おとよさんと太郎さんが来ました  
 ので、三人でお宮へまゐりました。

一 お祭

一

店 賣

鳥ゐのあたりは道のりやうがはに  
 いろいろな店がならんでゐます。おも  
 ちややにはらつばやかたなやひか  
 うきなどがならべてあります。ほほづ  
 きやふうせん玉を賣る店も出て  
 ゐます。又あめややくわしやではは  
 やし立てておきやくをよんでゐます。  
 ちやうど人の出きかりで、お宮のす



すがひつきりなしに  
 なつてゐます。私ども  
 もすすをなら  
 してをがみました。  
 お宮のうらではす  
 まふがはしまつてゐ  
 て、「わあわあ」とはや  
 すこゑがきこえます。

音

あちらこちらに子どものならすら  
つばやふえの音もして、たいそう  
にぎやかです。

今年

今年には田がよく出来たので、ば  
んにはそのおいはひの花火が上  
るさうです。

二柿

柿

私のうちには柿の木が五本あ

生

ります。しぶ柿が三本、あま柿が二本  
で、その中に私の木が一本あ  
ります。あま柿です。これは私が生  
れた年、おちいさんが私のぶん  
にすぎ木をして下さつたのださう  
です。

下男

おちいさんがこの柿の木をつい  
でいらつしやる時、下男の太七がわ

孫

らひながら、  
 「ごいんきよさま、そのお年でつきぎ木  
 をなさるのですか。」  
 といつたさうです。その時おぢいさ  
 んは  
 「孫へのこしてやるのさ。」  
 とおつしやつたといふことです。  
 今年は柿のあたり年で、どの木

枝

取

にもよくみが  
 なりました。私の  
 木も枝がを  
 れるほどなつて  
 ります。きのふ一  
 つ取つてみましたら、もう黒くごまを  
 ふいてゐました。  
 この二十五日はおぢいさんのめい日



皇 式 朝 節

です から、たくさん 取つて そなへる つ  
もり です。

三 十一月三日

ケフ ハ 十一月三日 デ、<sup>マイヂ</sup>明治節 デス。朝  
學校 デ 式 ガ アリマシタ。サウシテ 明  
治天皇 ノ オハナシ ヲ ウカガヒマシタ。  
ヒル カラ、トモダチ ト ムカフ ノ 山 へ  
上リマシタ。村 ノ 方 ヲ 見ル ト、ドノ

國 國  
四 四

谷

家 ニモ コクキ ガ 出シテ アリマシタ。  
谷ソコ ノ 一ケンヤ ニモ、川 ヲ 下ツテ  
行ク 小サナ 舟 ニモ、コクキ ガ 出シテ  
アリマシタ。  
タハン ガ スンデ カラ、ニイサン ニ 明  
治ジングウ ノ エハガキ ヲ 見セテ イタ  
ダキマシタ。

四 麥まき

黄

なら やくぬぎの

はは黄にそまり、

廣い たんぼに

北風 あれる。

風 に 吹かれて、

なま土 ふんで、

今日 も 朝 から

せい 出す おや子。」

四 麥まき

十

國國  
四四

麥

おや はかへして、

子 はくれ うつて、

廣い たんぼの

麥まき すます。

「やつと すんだ。」と

見上げる 空に、

あす も 天氣か、

夕日 が 赤い。

氣

四 麥まき

十一



五 白ウサギ

島

島ニ 井夕 白ウサギガ、ムカフノ大

キナ ヲカヘ 行ツテ 見タイト オモツ

テ、海 ヲ ワタル クフウ ヲ シテ 井マ

シタ。アル 日 ハマベヘ 出テ 見ル ト、

ワニザメガ 居マシタ カラ、

「オマヘノ ナカマ ト ワタシノ ナカ

マト、ドツチガ 多イカ、クラベテ ミ

居

多

ヨウ。

ト イヒマシタ。ワニザメハ

「ソレハ オモ白カラウ。

ト イツテ、スグニ ナカマ ヲ 大ゼイ ツ

レテ 來マシタ。白ウサギハ コレヲ 見

テ、

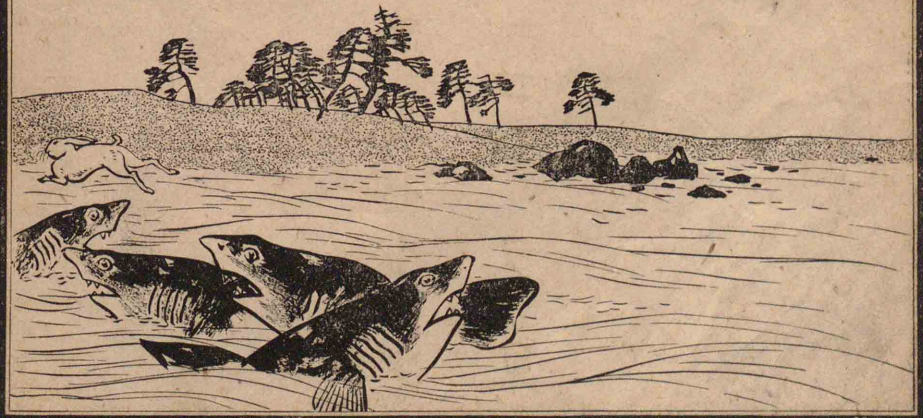
「ナルホド、オマヘノ ナカマハ ズキブ

ン 多イ。ワタシ タチノ 方ガ 少イ

少

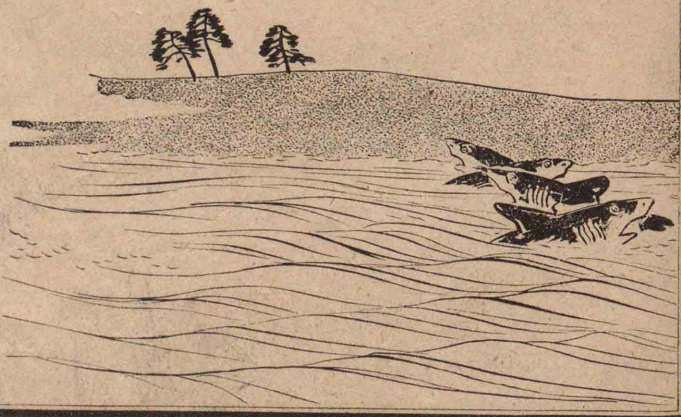
カモ シレナイ。オマヘ  
タチノセ中ノ上ヲ  
アルイテ、カゾヘテ ミル  
カラ、ムカフノヨカマ  
デナランデ ミヨ。  
トイヒマシタ。

ワニザメ ハ 白ウサギノ  
イフ 通りニ ナラビマシ



タ。白ウサギ ハ 一ツニ  
ツト カゾヘテ、ワタツテ  
行キマシタガ、イマ 一足  
デヨカヘ 上ラウトイ  
フ トコロデ。

オマヘ タチハ ウマク  
ワタシニ ダマサレタナ。ワタシハ  
コ  
ノヨカヘ 來タカツタノダ。



毛

ト イツテ ワラヒマシタ。ワニザメ ハ ソ  
 レ ヲ キク ト、タイソウ オコツテ、一バン  
 シマヒ ニ 居タ ノ ガ、白ウサギ ノ 毛  
 ヲ ミンナ ムシリ取ツテ シマヒマシタ。  
 白ウサギ ハ イタクテ タマリマセン カラ、  
 ハマベ ニ 立ツテ ナイテ 居マシタ。ソコ  
 へ 神様 ガタ ガ オ通りガカリニナツテ、  
 ナゼ ナク ノ カ。

神様

ト オタヅネ ニ ナリマシタ。ワケ ヲ 申  
 シ上ゲマス ト、  
 「ソレ ナラ 海 ノ 水 ヲ アビテ、ネテ  
 居ル ガ ヨイ。」  
 ト オヲシヘ ニ ナリマシタ。  
 白ウサギ ハ スグ 海 ノ 水 ヲ アビマ  
 シタ ガ、前 ヲリ モ カヘツテ イタク ナ  
 ツテ、クルシガツテ 居マシタ。

ソコへ 大國主ノ神ガ 才出デ ニナリ  
 マシタ。コノ 神様ハ サキホド 才通り  
 ニナツタ 神様ガタノ 弟ノ 方デ  
 ス。兄様ガタノ オトモヲ シテ、フク  
 ロヲ カツイデ イラツシヤツタ ノデ、オ  
 オクレ ニナツタ ノデス。  
 コノ 神様モ、  
 ナゼ ナクノカ。



トオタツネ ニナリマシタ。白ウサギハ  
 目ヲ コスツテ、又ソノ ワケヲ 申シ  
 上げマシタ。スルト 神様ハ

ソレハ カハイ サ  
 ウダ。早ク 川へ  
 行ツテ、シホケノ ナ  
 イ水デカラダヲ  
 アラツテ、ガマノ ホ

ヲ シイテ、ソノ 上ニ コロガレ。  
 ト ヲシヘテ 下サイマシタ。  
 白ウサギ ガ ソノ 通りニ シマス ト、カ  
 ラダ ハ スツカリ モトノ ヤウニ ナ  
 ホリマシタ。ヨロコンデ 大國主ノ神ノ ト  
 コロヘ オレイニ 行ツテ、  
 「オカゲサマ デ、カラダハコノ 通りニ  
 ナホリマシタ。アナタハ オナサケブカイ

後

オ方 デス カラ、後ニハ キツト オシ  
 アハセノ ヨイコトガゴザイマス。  
 ト 申し上げマシタ。  
 ソノ 後 大國主ノ神ハ 白ウサギノ イ  
 ツタ 通り、エライ オ方ニ オナリニ ナ  
 リマシタ。

六 をぢさんのうち

山一つ むかふの村に をぢさんの

うちが あります。私 は きのふ ふろし  
きづつみ を 持つて、おつかひ に 行きま  
した。

をぢさん の うち では、には 一ぱい も  
み が ほして あつて、足の ふみば も  
ない くらゐ でした。うちの 人は み  
んな たんぼ へ 出て、おばあさんが 日  
あたり の よい えんがは で つぎ物 を

今

して いらつしやいました。

おばあさん は もう 耳 が 遠い ので、大  
きな こゑ で、

「おばあさん、今日 は。」

と いふ と、ふりかへつて、

「おう、三ちゃん か。よく 来た ね。」

と いつて、ふろしきづつみ を 受け取つて、  
とだな から うでた くり を おぼん に

一ぱい 持つて 来て 下さいました。  
前の 畠の 柿の 木は、は が ま  
つかに なつて ゐて、二つ 三つ とりのこ  
して ある 柿が、赤い 玉の やうに  
光つて ゐます。

えんさき の さざんくわ に、目白 が 二  
は 来て ゐて、枝 から 枝へ とんで  
ゐます。にはとり が 時々 もみ を かき

出します。おばあさんが「ほう ほう」とい  
つて おおひ になります ど、にはとり  
より さきに、すずめ が ぐらの やね  
へ にげて 行きます。

おばあさんが

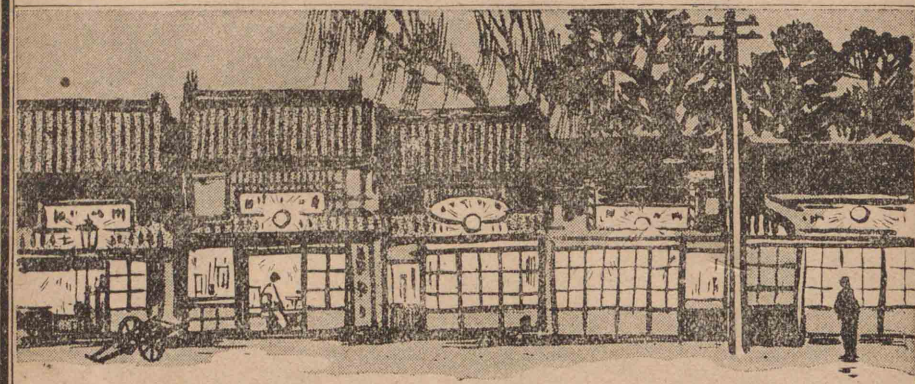
「今日は こんなに もみが ほして あ  
る から、をぢさん も をばさん も 早  
く かへります。もつと あそんで お出で。」

どいつて おとめ になりました が、お  
そく なる と おもつて、 いただいた くり  
を 持つて かへりました。

七 私どもの町

私 ども の 町 ても、 この あひだ から  
電 とう が つく やう になりました。 町  
やくば も、 けいさつしよ も、 いうびんきよ  
くも、 みんな の きらんぷ が 電 とう に

屋 夜 店



かはりました。  
米屋 ごふく屋 小ま物屋 あ  
ら物屋 くすり屋 さか屋 さ  
かな屋、 その ほか 大きな  
店 は いくつ も 電 とう を  
つけました。 本町通 は 夜 も  
ひる の やう で、 りはつ店  
などは まぶしい ほど です。



私 の うち でも 二つ つけました。電と  
う は らんぶ と ちがつて、へやの すみ  
ずみ まで あかるく、その 上 火の よ  
うじん も ようございます。

よこ町 に 電氣の 力で、米 を つく  
家 も 出来ました。電話 も 近い 中に  
私 どもの 町へ かかる さう です。

工場 話 町

又 町はづれ に 大きな 工場 の ふしん

が はじまつて 居ます。もう 高い えんと  
つ は 大方 出来上りました。これは 大  
じかけで れんぐわ を やく 工場 です。  
これ が 出来上る ころ には、てつだう が  
私 どもの 町 を 通つて、工場 の 近  
く に ていしや場 が 出来る さう です。  
さう なつたら 町 は どんなに べんりに  
なる でせう。

八 山びこ

向

正太郎が犬をつれて、山道を通り  
ました。犬のすがたが見えなくな  
つたので、「ぼち ぼち」とよびますと、向  
ふの方で、「ぼち ぼち」と口まねを  
するものがあります。

友

友だちでも居るのかとおもつて、  
「おうい」とよぶと、「おうい」といひ、  
「だ

答

話

れだといふと、「だれだ」と答へます。  
正太郎がおこつて、「ばかといひますと、  
又向ふで、「ばか」と口まねをします。  
そこへ「ぼち」が來ましたので、一しよに  
向ふの方へ行つてみました。が、だ  
れも居ませんでした。

うちへかへつて、父にこのことを  
話しますと、父は

おそれ「それは山びこです。だれも居るの  
ではありません。」  
とをしへました。

正「山びことは何のことでございま  
すか。」

父「ごむまりをかべになげつける と、は  
ねかへる でせう。」

正「はい。」

先

父「人のこゑも山の中では、かべに  
あたつたごむまりのやうに、かへつて  
來ることがあります。それが山びこ  
です。」

こちらでやさしくいへば、向ふでも  
やさしく答へ、おこつていへば、おこつて  
答へるのです。向ふで「はか」とい  
つたのも、お前が先に「はか」と

いつたからです。

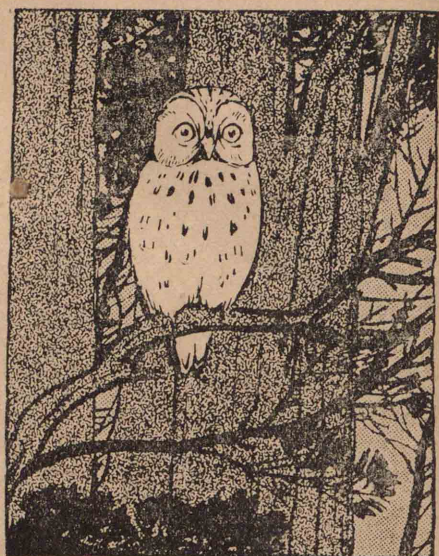
九 フクロフ

フクロフハオモ白イカツカウノ鳥デ  
 ス。フクレタカラダマンマルナ目。カホ  
 ハネコノヤウデ其ノ上ネズミヲ  
 トツテクフノデネコ鳥トイフトコ  
 ロモアリマス。  
 夜ニナルトホカノ鳥ハ大ガイ

其

此

林明夜



目が見エナクナル  
 ノニ此ノ鳥ハ見  
 エルノデホカノ鳥  
 ヲイデメタリツカミ  
 コロシテエニシタリシテアバレマハ  
 リマス。其ノ中ニ夜ガ明ケルト目  
 ガ見エナクナルノデ森ヤ林ノヒ  
 クイ木ノ枝ニトマツテボンヤリト

鳥 所

シテ 居ル コト ガ アリマス。  
 スルト ホカ ノ 鳥 ガ 見ツケテ、ア、ニ  
 クイ ヤツ ガ 居ル。ト イハナイ バカリ  
 ニ、ヨツテ タカツテ イヂメカヘシマス。  
 鳥 ハ 大キナ コエ デ ワルロ ヲ イヒ、  
 太イ クチバシ デ ツツキマス。モズ ハ 小サイ  
 ガ、マケヌ氣 ノ 鳥 デス カラ、高イ 所  
 カラ トンデ 來ガケ ニ、フクロフ ノ カホ

鳴

ヲ ケツテ、キイ キイト カチドキヲア  
 ゲマス。スズメ ハ ヨワイ 鳥 デス ガ、ソバ  
 ヘ ヨツテ、ヲドツタリ サヘツツタリ シテバ  
 カニ シマス。ソレ デモ フクロフ ハ シ  
 方 ガ ナイ ノデ、大キナ 目 ヲ 見ハツテ  
 キヨトキヨトシテ 居ル バカリ デス。  
 フクロフ ノ 鳴キゴエ ハ 所 ニ ヨツテ  
 イロイロ ニ イヒマス。フクロフ ガ 鳴ク ト、

其ノ明クル日ハ天氣ガヨイカラ、  
「ハリツケホウセ」ト鳴クノダトイフ  
所モアリマス。

十日と風

先勝

ある時、日と風が力くらべをし  
ました。たび人のぐわいたうをぬがせ  
た方が勝といふことにきめて、  
先づ風からはじめました。

心番

風は何「一まくりにして見せよう。」  
とはげしく吹立てました。するとたび人  
は、風が吹けば吹くほど、ぐわいたう  
をしつかりとからだにくつつけました。  
こんどは日の番になりました。日  
は雲のあひだからやさしいかほを  
出して、あたたかな光をおくりました。た  
び人はだんだんよい心持になつて、

負

しまひにはぐわいたうをぬぎました。そこで、風の負になりました。

十一すすはき

昨日

昨日はうちのすすはきでした。おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、下女や手つだひのものにおきしづをして、おはたらきになりました。

女

外

机

一番先にしやうじやからかみが外へ出されました。かけ物やがくもはづされました。にはへいたやむしろをしいて、そこへ火ばちや机や本箱やいろいろな物がはこび出されました。たんすをうごかすと、其のうしろから物さしと花子のお手玉が出ました。つづらや長持も出されました。

戸 後 僕

戸だな や 戸だな の 中 の 物 も み  
んな 外 へ 出されました。  
だい所 で いろいろ な 物 を のける と、  
子ねずみ が 一びき とび出しました。下女  
が びつくりして、「きやつ」といつた ので、  
後 で みんな に わらはれました。  
はたばた、はたばた、いよいよ さうちが は  
じまりました。僕 も はたき を 持つて

吉

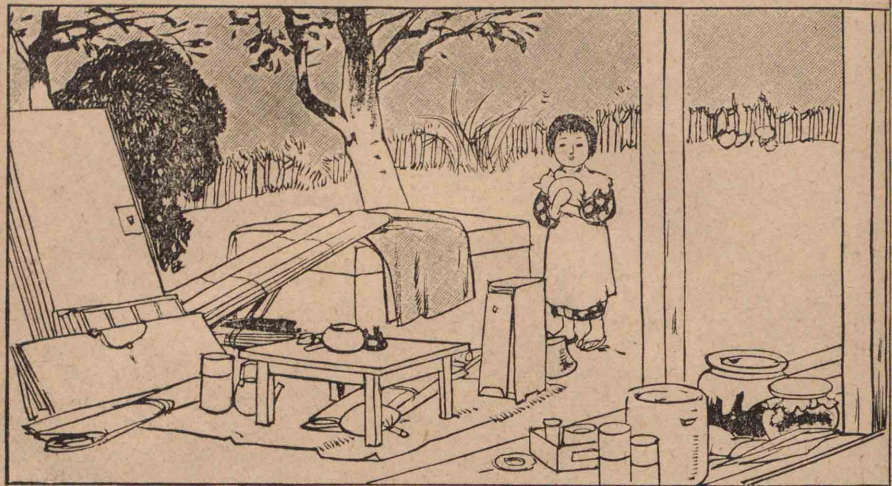
手つだひました。天じやう を はらふ、たた  
み を たたく、ひさしうら の くもの す  
を取る、勝手 の すす を はらふ、まる  
で いくさ の やう でした。  
手つだひ の 今吉 が おどけて、はうきを  
大なきなた の やう に 持つて、べんけい  
の まね を しました。僕 は 牛わかまる  
になつて、はねまはつて たたかひましたら、





自分

おかあさんに しかられ  
 ました。花子はねこを  
 だいて うろろうして 居  
 ましたので、  
 「花子も 自分のお  
 もちや だけ、ちやんと  
 おかたづけ なさい。  
 と いはれました。



「此のごろ は 大きうち  
 が やかましく なつた  
 から、すずはきは 大  
 きに らく になりま  
 した。  
 と 今吉が いひました  
 が、それでも ふきさう  
 ちが すんで、すつかり

内

いろいろな物をもとの所へなほ  
したら、夕方近くになりました。

おとうさんがおかへりになつた時  
には、家の内も外もきれいになつて居  
ましたので、みんながほめられました。

十二 かるた取

友一のうちでかるた取がはじまつて  
居ます。よみ手はおぢいさんで、取手は

みよ子 ちよ子 國太郎 音二郎の四人と、  
友一と友一のあねの道子です。  
今ちらしで取つて居ます。

「花よりだんご。」

みよ子「はい、ありました。」

「ちりつもつて山となる。」

國太郎「はい。」

「ねんにはねんを入れ。」

ちよ子「はい。」

おににかなぼう。

音郎「はい、とりました。」

ゆだん「大てき。」

友一「はい。」

道子「私が取つたのです。」

友一「いいえ、僕が取つた

のです。」



「さう ひつぱりあつて

はいけません。まん

中へふせて おき

なさい。こんど取つた

人がそれをも取ることにします。

さあ、つぎのをよみます。」

「負けるは勝。」

道子「はい、取りました。せんのも私が



取りますよ。

「なきつらにはち。」

道子「はい。」

これから友一はだんだんあせり出し  
ました。みんなもしまひにはむちゆう  
になつて取りました。

一どすみしました。道子が十二まい、みよ  
子が十まい、國太郎が九まい、ちよ子

分

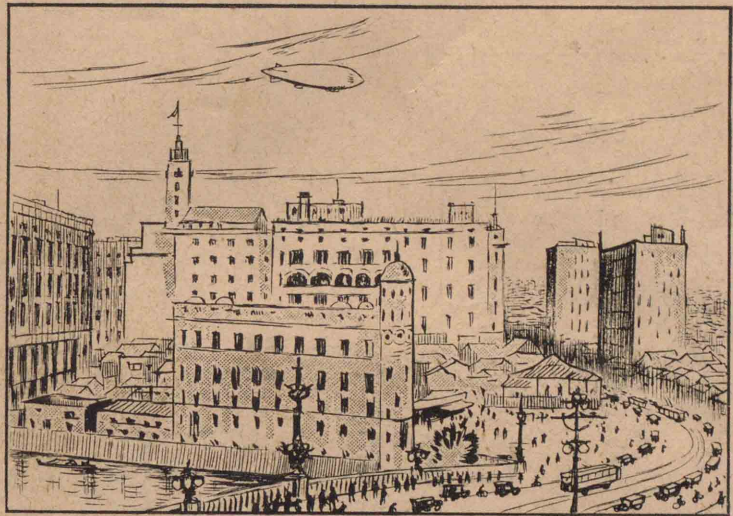
が八まい、音二郎が六まい、友一はた  
つた二まいでした。  
それから又二くみに分れて、何べん  
も取つてあそびました。

いろはにほへとちりぬるを  
わかよたれそつねならむう  
るのおくやまけふこえてあ  
ききゆめみしゑひもせす

あかり

東京

年



十三 急はがき

勝太郎、東京のをち  
 さんからお前の所  
 へ急はがきが來ま  
 した。よんで「ごらん。  
 はい。」  
 新年おめでたう。此  
 のあひだひかうせん

四四

が東京の空をとびました。これは  
 其の急はがきです。

十四 お話 二つ

宿

東京の宿屋で、山國のものと、島  
 國のものがおちあひました。山國の  
 ものが  
 「印は山から出て、山へはいる。  
 といへば、島國のものが

根

聞

「いや、海から出て、海へはいる。」  
 といつて あらそひます。そこへ宿屋の  
 ていしゆが来て、

「へええ、日は屋根から出て、屋根へ  
 はいるものではございませんか。」

「お前はたいそうとんちがある」と  
 聞いた。此のからかみにかいてある

追

思



とらをしばつて見  
 せよ。  
 「しばつてお目にか  
 けます。どうぞここ  
 へ追出して下さいま  
 せ。」

十五 しひの木とかしのみ  
 思ふ ぞんぶん はびこつた

山のふもとのしひの木は、  
根もとへ草もよせつけぬ。

山の中からころげ出て、

人にふまれたかしのみが、  
しひを見上げてかういつた。

今に見てゐる、僕だつて、

見上げるほどの大木に  
なつて見せずにおくものか。

何百年かたつた後、

山のふもとの大木は

あのしひの木か、かしの木か。

十六 大工小屋

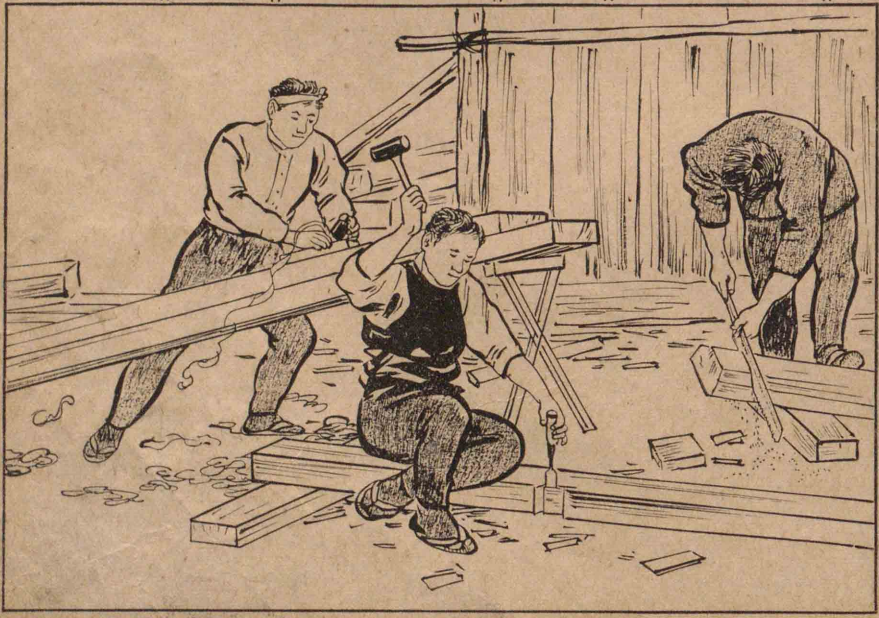
私ノウチデハ此ノゴロ土ザウノ

大 工 仕事

フシン ガ ハジマツテ 居マス。ニハニ大  
 工小屋 ヲ タテテ、大ゼイノ 大工 サン  
 ガ 毎日 其ノ 中 デ 仕事 ヲ シテ 居マ  
 ス。  
 ドンナ サムイ 日 デモ、大工 サン ハ ニ  
 ンナ シルシバンテン ヲ ヌイデ、井セイ  
 ヨク ハタライテ 居マス。  
 ノコギリ デ 木 ヲ キル モノ モ アリ、

板

ノミ デ アナ ヲ ホ  
 ル モノ モ アリ、  
 カンナ デ 板 ヲ ケ  
 ヅル モノ モ アリ  
 マス。  
 私 ハ カンナ ヲ カ  
 ケテ 居ルノ ヲ 見  
 ルコト ガ スキ デ





中

ス。ヨク キレル カンナ ガ スウツト 板  
 ノ 上 ヲ 通ル ト、カンナクツ ガ ヒト  
 リデニ クルリト マハツテ スベリオチマス。  
 風 ガ 吹ク ト、カンナクツ ガ 小屋中  
 マツテ アルキマス。  
 私 ハ 昨日 大工 サン カラ 木 ノ キ  
 レ ヲ タクサン モラツテ、友ダチ ト ツ  
 ミホ ヲ シテ アソビマシタ。

十七 扇のまと

扇

屋島 の たたかひ に、げんじ は をか、  
 へいけ は 海 で、向ひあつて 居ました  
 時、へいけ方 から 舟 を一そう こぎ  
 出して 來ました。見れば へさきに 長い  
 さを を 立てて、其の さをの 先には、  
 ひらいた 赤い 扇 が つけて あります。  
 一人 の くわんぢよ が 其の 下に 立

つて、まねいて 居ます。さをの先の扇  
をいよといふのでせう。

下 | 弓 | 名人 | 矢 | 家來

舟はなみにゆられて、上つたり下つ  
たりします。扇は風に吹かれて、く  
るくるまはつて 居ます。いくら弓の名人  
でも、これを一矢でいおとすことは、  
なかなかむづかしきうです。  
げんじの大しやうよしつねは家來

羽 |

に向つて、

「だれかあの扇をいおとすものは  
ないか。」

とたづねました。其の時一人の家來  
がすすみ出て、

「なすのよ一と申すものがござい  
ます。空をとんで居る鳥でも、三  
羽ねらへば、二羽だけはきつとい

上手

おとす ほど  
の 上手 で  
ございます。

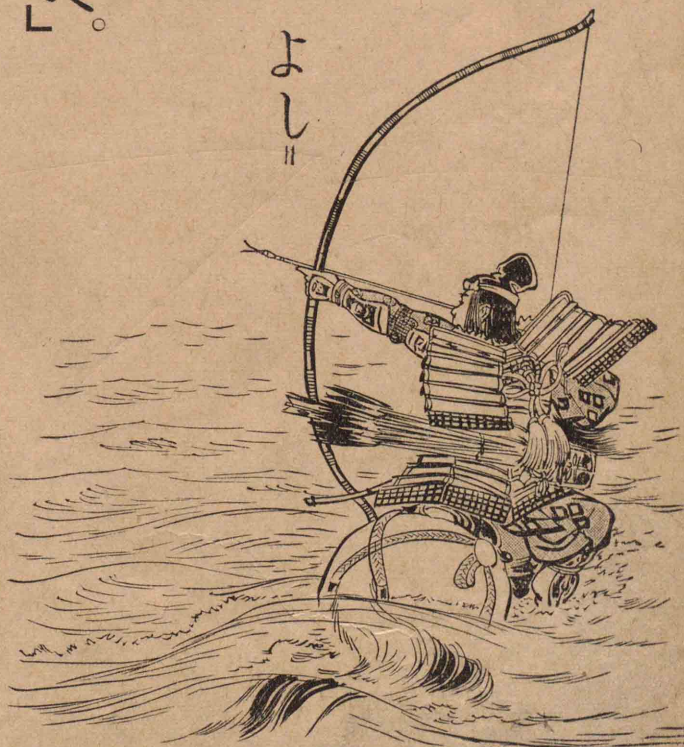
と いひました。 よし

つね は

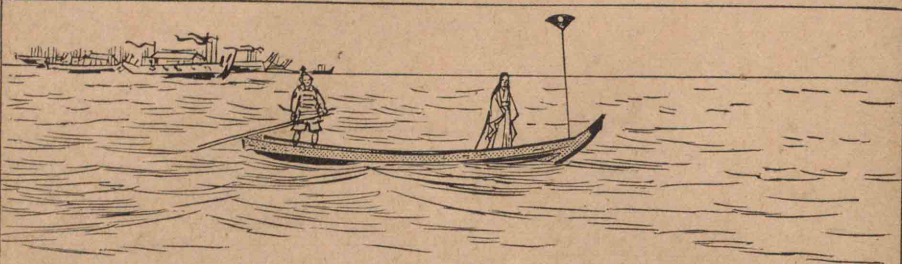
「それをよべ。」

と、すぐに よ一 を よび出しました。

よ一 は じたいしました が、 よしつね が



生馬



ゆるしません。よ一は心の  
で、もしこれをいそこなつた  
ら、生きては居まいとかくご  
をきめて、馬にまたがつて、  
海の中へのり入れました。  
弓をとりなほして、向ふを見  
わたすと、舟がゆれて、まと  
がさだまりません。しばらく目

少度

をつぶつて、神様にいのつてから目をひらいて見ると、今度は扇が少しおちついて見えます。よーは弓に矢をつがへ、よくねらひをさだめて、ひようといはなしました。

赤い扇はかなめのきはをいきられて、空に高くまひ上つて、ひらひらと二つ三つまはつて、なみの上にお

ちました。

をかの方では大しやうよしつねをはじめ、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。海の方でもへいけ方がふなばたをたたいて、一度にどつとほめました。

十八山がら

私のうちに山がらが一羽かつてあ

りました。たいそうよくなれて、私の手  
から魚をたべるほどになつて居  
ました。

それがかはいさうに、あるばんねず  
みに足のゆびをくひきられました。  
どんなにか鳴いたのでせうが、うち  
のものは朝までしらずに居ました。  
きずを見てやらうと思つて、私が

かごの戸を明けますと、山がらは  
とび出して、竹がきの上にとまつて、  
それからうらの山へとんで行つて  
しまひました。

これは私が七つの年のことであ  
したが、今でも山がらのこゑをき  
くと、まだあれが生きて居るだら  
うか、足のきずはどうしたらう

かと 思はない ことは ありません。

十九 ナヅ

雪

私 ドモ 二人 ハ 色 モ ナリ モ ヨク  
ニテ 居マス。 雪 ノ ヤウ ニ 白ウ ゴザ  
イマス ガ、 雪 ノ ヤウ ニ ツメタク ハ  
ナク、 又 日 ニ テラサレテ モ トケマセン。  
シカシ ユ ヤ 水 ニハ スグ トケテ シ  
マヒマス。

皆

一人 ハ タイソウ 皆サン ニ スカレマス  
ガ、 一人 ハ アマリ スカレマセン。 シカシ  
二人 トモ 大セツナ モノ デ、 ドナタ ノ  
ウチ ニモ、 ナカマ ノ モノ ガ 大テイ 行  
ツテ 居マス。

私 ドモ ハ 何 ト 何 デセウ。

二十 一本杉

杉

私 は 道ばた の 一本杉 です。 もう 二

百年 あまり も ここ に 立つて 居ます。  
 東の村では「それ、もう日がくれるぞ。一本杉のうしろへお日様がおはいりになつた。」といひ、西の村では「ああ、よいばんだ。一本杉のふところからお月様がお上りになつた。」などと申します。  
 私は長生をして居ますので、東の

死

火事



村や西の村に、人が生れたり、死んだり、家がたつたり、こはれたり、火事があつたり、水が出たりした

知  
村長

ことをみんな見て知つて居ます。  
私は東の村の今の村長さん  
のおぢいさんやおばあさんを其の  
わかい時から知つて居ました。まことに  
によくはたらく人たちでした。せい  
の高い私の目にも、まだお日様  
が見えない中から、くはやかまを  
持つてたんぼへ行きました。又私の

作  
稻

かたの上で、お星様が光りはじめる  
ころになつて、小さなわらぶきのうち  
へかへつて行きました。此の人たちの  
田や畠の作り方はていねいでした  
から、稲も麥もよそのよりは  
よく出来ました。それでだんだんうち  
がよくなりました。  
今の村長さんのおとうさんもお



金

となしい人で、小さい時からよくは  
 たらきました。西の村一番の金持  
 のむすめさんが、此の人の所へ  
 およめに來ましたが、其の時はな  
 かなかにぎやかなことでした。  
 今の村長さんも子ども時から  
 すなほで、なさけぶかい人でした。あの  
 うちには此の上よくなるばかりでせう。

四四

間

此の間さびしいおきう式が私の  
 前を通りました。それは西の村で、  
 二番目の金持だといはれたうちに  
 生れた人のでした。此の人は小さ  
 い時からいたづらもので、大きくな  
 つても、うちの仕事もせず、あつて  
 ばかり居ました。それでとうとう家も  
 土ざうも田も畠も人の物に

間

なつて しまひました。それからどこへ  
 行つて 居たか、村にも ひさしく 居ま  
 せんでした。  
 かへつて 来た 時 には、ひどい みなりを  
 して 居ました。私 の 下 で、長い 間  
 しょんぼりと して 居まして、日 が くれ  
 て から 村 へ はいりました。其の 後  
 間 も なく 死んだ の です。さむい 日

送 外

の こと で、あまり 氣のどく でしたか  
 ら、私 が 風 の 音を ごうつと させ  
 て やりましたら、送つて 行く 人が「此の  
 人も 一本杉 の 外 に ないて くれる も  
 の が なく なつた。」と いひました。  
 私 は 長い 間 に 子ども を たくさん  
 見ました ので、どう いふ 子は どう  
 いふ 人 になる と いふ こと を 見

ぬきます。学校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をころしたりするやうな子どもは、大ていろくなものになりません。

二十一 汽車のたび

時  
汽車  
軍

昨日 おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るにいさんの所へ出かけました。

河

てつけうへかかった時、河を見た。ら、たいそう水が出て居ました。

「此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」

と たづねましたら、

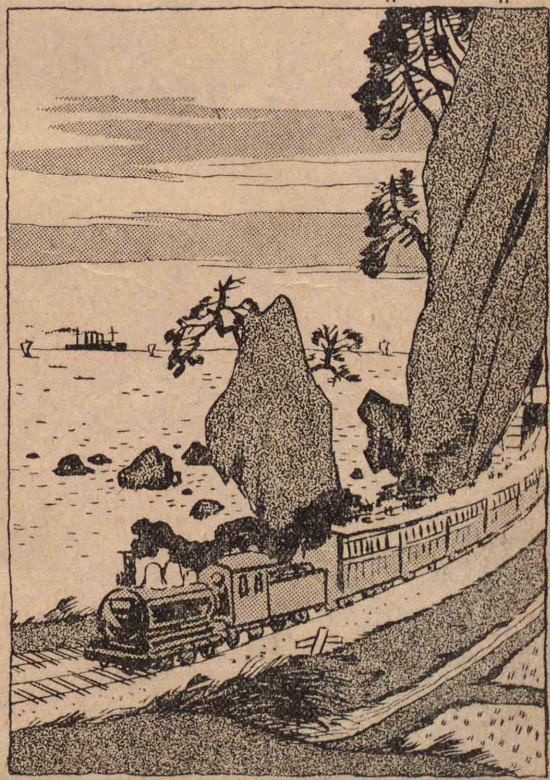
「河上の方で雪がとけはじめたのだらう。」

といふことでした。

下

船

トンネルを出て、海を見下した時には、いつ見てもよいけしきだと思ひました。ちやうど大きな船がおきを通つて居ました。ほばしらりが二本、えんとつが四本の船です。そば



國四

乗

着

見物

買

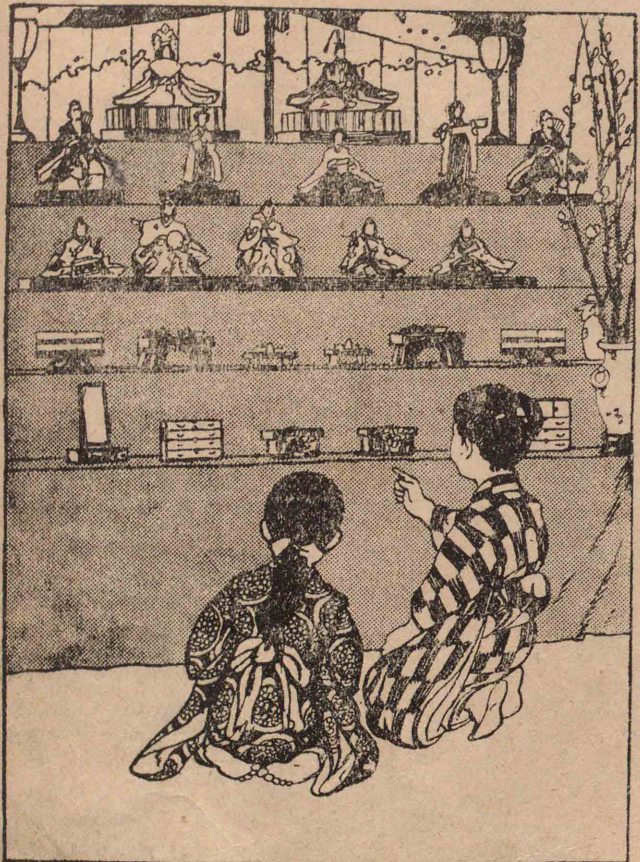
に乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。むかふのてい車場へ着いたら、いきんがむかへに来て居ました。三人で町を見物しました。ひるのごいはんをたべてから、へいえいを見せてもらひ、弟へへいたいばうをおみやげに買つて、夕方の汽車でかへ

りました。

二十二 ヒナマツリ

才花 ハ オカアサン ニ オヒナ様 ヲカ  
 ザツテ イタダキマシタ。モモノ花ガ花  
 イケニ サシテ アリ、ヒシモチモモウ  
 ソナヘテ アリマス。今 オキク ト オヒナ  
 様 ノ 前 ニ スワツテ ナガメテ 居マ  
 ス。

國四



オキク「マア、キレイ デス コト。ダイリ様  
 ノ 下 ノ ダン ニ、弓 ヤ 矢 ヲ 持

ツテ 居  
 ル人ハ  
 何 デセ  
 。

才花「クワ  
 ンデヨノ

リヤウワキニカザツテアルノデセウ。  
ズキジンデス。ダイリ様ノゴ家來  
ダサウデス。

オキク五人バヤシノ一番右ニ居ル  
人ハ何ヲスルノデセウ。

オ花扇ヲ持ツテ居ル人デスカ。ア  
レハウタヲウタフ人ダサウデ  
ス。

二人ガオ話ヲシテ居ル所へオ花  
ノオカアサンガ來マシタ。

「ヨバサン、今日ハ。」

明日

「オキクサンデスカ。明日ハオセツク

デスカラ、學校ガヒケタラ、スグア

ソビニオ出テナサイ。オチヨサンモ

オ松サンモ來マス。」

「アリガタウゴザイマス。」

春 里 野

二十三 春が来た

春が来た、春が来た、

どこに来た。

山に来た、里に来た、

野にも来た。

花がさく、花がさく、

どこにさく。

山にさく、里にさく、

兄弟

二十四 曾我兄弟

鳥が鳴く、鳥が鳴く、

野にもさく。

どこで鳴く。

山で鳴く、里で鳴く、

野でも鳴く。

曾我兄弟は兄を十郎、弟を五郎と

いひました。十郎が五つ、五郎が三つ

泣

の年に、父はくどうすけつねにこゝろされました。

母は泣きながら二人の子どもに、

「何といふくやしい事だらう。お前

たちが大きくなつたら、此のかたき

を取つておくれ。」

といひました。五郎はまだ小さくて、何

も分りませんでしたが、十郎はなみ

強 遊

だをおさへて、

「きつと此のかたきを取つて見せま

と答へました。

九つとなり、七つとなつたころから

は、遊事にも、兄が弓をひけば、弟

はたちをふりまはし、早く強くなつて、

かたきを取らうと心がけました。けれ



將

どもかたきのくどうは、みなもとの  
 よりともといふ大將のお氣に入りて、  
 いつも大ぜいの家來をつれて居ます。  
 二人のものはなかなかそばへよる  
 ことも出来ません。くどうが東へ行  
 けば、兄弟も東へ行き、西へ行け  
 ば、西へ行き、長い間つけねらひまし  
 たが、手を出すすきはありません

引 國

でした。

ある年、よりともは日本國中のさむらひ  
 を引きつれて、ふじのまきがりをい  
 たしました。かたきのくどうもよりとも  
 のおともをして行つて居ます。兄弟  
 は今度こそはと、母にいとまごひ  
 をして、ふじのすそ野へ急ぎまし  
 た。

夜

五月二十八日、雨のふるばんの事です、二人はたいまつで道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。

今夜かぎりのいのちと思つて、

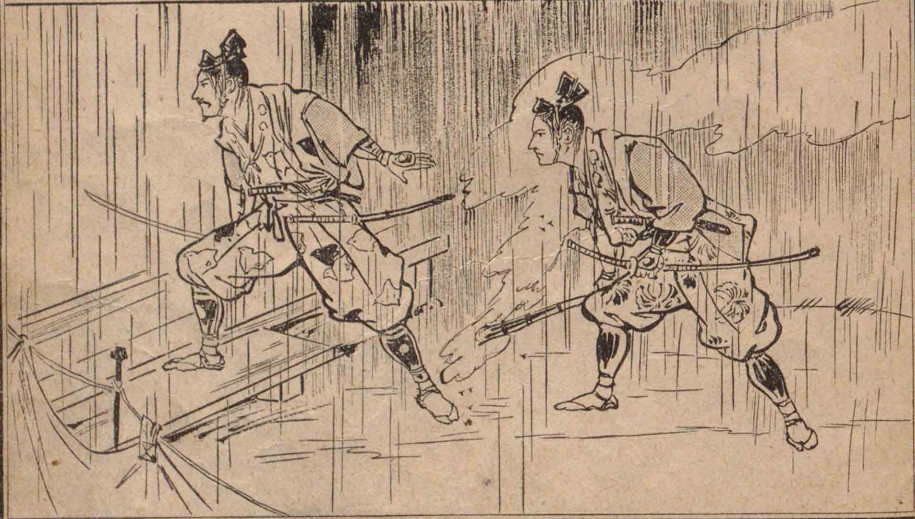
十郎「五郎、かほを見せよ。」

五郎「兄上。」

二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。

合

兄弟はくどうのやかたへふみこみました。ふみこんで見ると、くどうはよくね入つて居ます。ね入つて居るものをきるはひけふと、  
「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまるつた。」



と名のりました。すけつねも人に知られたさむらひ

「心えた。」

刀  
と、まくらもとの刀を取つておき上  
らうとしました。二人はすかさずう  
ち取つて、十郎は二十二、五郎は二十、  
父がうたれてから十八年目にめで  
たくのぞみをとげました。  
をはり

昭和三年二月七日修正印刷  
昭和三年二月九日修正印刷  
昭和三年二月十日翻刻印刷  
昭和三年二月廿八日翻刻發行

著作権所有

著作兼  
發行者

文部省

標準國語讀本卷四

定價金九錢

臨時定價金拾壹錢

翻刻發行  
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地19  
日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地  
日本書籍株式會社工場

昭和三年二月十四日  
文部省檢査濟

發賣所

東京市麴町區飯田町一丁目三番地  
株式會社 國定教科書共同販賣所

品二

本多子

